

程よい甘さ市街地産

まえばしハニープロジェクト初の蜜搾り



現場発

とろりと蜂蜜が流れ出ると、関係者から大きな歓声が上がった。前橋市の中心市街地でミツバチを育てて蜂蜜をつくる「まえばしハニープロジェクト」が始動してから約2カ月。国道17号沿いの前橋テルサ(同市千代田町)に設置した養蜂箱のミツバチは順調に増加。13日は初めての蜜搾りが行われ、蜜を集めやすいようにと高校生が花を植えた。今後は子どもたちのワークショップや新たな商品開発も目指す。蜂蜜を核にした町おこしが本格化する。

ゆつくりと箱を開けて巣枠を取り出すと、ミツバチがびっしり。元氣な羽音が響いた。当初は約8千匹だったが、今は2倍以上に増えて養蜂箱も二つになった。蜜の詰まった巣枠を持ってみると、ずっしりとした重さに驚いた。巣枠に固まった蜜ろうを包丁で慎重にはがして蜜搾りの機械へ。ぐるぐる回すとハンドルを回すと、遠心力で枠から離れた蜂蜜が下にたまっていった。採れたての蜂蜜は程よい甘さ。約7歳採れた。テルサの小野里芳弘館長は「始める前はど

ミツバチの世話をしている小野里館長ら。撮った写真や動画をフェイスブックで「みつばち日誌」として発信している

なるかと思っただけどよかった」と胸をなで下ろした。プロジェクトは、養蜂に携わった経験のあるFMぐんまパーソナリティーの内藤聡さんが発案。テルサの指定管理者、公益財団法人前橋市まちづくり公社が実施し、イベントなどを手掛

けるコイエイ(同市)が創業50周年の社会貢献活動として協力している。テルサの職員らが地元の養蜂組合に教わりながらミツバチを世話している。養蜂箱の中を確認し、餌の砂糖水を与える。職員の今井利恵さんは「虫は苦手だったが、初めて花粉を付けたハチを見つけた時はうれしかった」とほほ笑んだ。地域にも徐々に浸透。近くの商店街から「花壇にミツバチが来ていたよ」などと声が掛かる。13日は勢多農高グリーンライフコースの2年生19人が訪れ、同校で育てたマリーゴールドや

サルビアなどをプランター25個に植え替え、テルサの周囲に設置した。採れたての蜂蜜を食べた相川夏乙さん(16)は「濃厚でおいしい」。関口天さん(17)は「自分たちの花から蜜を作ってくれたら自慢になる」と喜んだ。蜂蜜は商品開発のためにも活用する。7月にはミツバチの生態を学ぶ子ども向けワークショップも予定。小野里館長は「ミツバチは順調に増えており、いろいろと展開していきたい」と説明。夢が膨らむ。

(前橋支局 浦野葉奈)

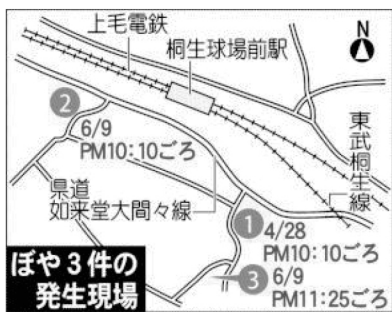
桐生 不審火3件相次ぐ

4~6月 衣類、段ボール焼く

4月下旬~6月上旬に桐生市内で洗濯物や段ボールなどが燃えるばやが3件相次いだことが13日、桐生署などへの取材で分かった。半径200mほどの狭い範囲に集中していることなどから、同署は不審火の可能性があるとみて捜査するとともに、パトロールを強化。地元町会は各戸に警戒を呼び掛けている。

同署などによると、ばやの発生はいずれも同市相生球場前駅の南東約200mのマンション1階のベラン

ダに干してあった衣類が燃えた。6月9日午後10時10分ごろ、最初の現場の北西約350mのマンション1階の郵便受け内のチラシが燃えた。同11時25分ごろには、このマンションの南東約450mの住宅の自転車置き場で段ボール箱が焼損。いずれも火の気はなかったという。ばやの連続発生を受け、地元の相生町二丁目町会第四町会は10日、8~7世帯



ばや3件の発生現場